

時は迫っている

I コリント 7 章 25～40 節

はじめに

7 章では、コリントの教会からの質問に応じて、結婚や離婚のことが記されています。少し細かすぎるのではないかと思います。使徒パウロが教会の必要に丁寧に応じていることがよくわかります。先々週は 17～24 節から「キリスト者の自由」と題し、キリスト者の生き方の原則を学びました。それは「それぞれ主からいただいた分に応じて、また、それぞれ神から召されたときのままの状態歩む」ことでした。先週は菊池実先生がエレミヤ書 10 章 23, 24 節から「道はその人によるのではなく」と題して語ってくださいました。午後のセミナー「主イエスの歩いたエルサレム」も良い時であったとのことで感謝でした。今日はまた I コリント 7 章に戻ります。

1、未婚の人たちについて（25～28 節）

25 節「未婚の人たちについて、私は主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみにより信頼を得ている者として、意見を述べます。」

聖書は神の靈感によって記されるのですが、それは神の啓示を受けて、その人の意思とは関係なく手が動いて聖書を記すというようなことではありません。旧約聖書の預言書の中には、主が幻を示され、預言者自身はその意味が十分にはわからないまま書き記すというような場合もあります。新約聖書では黙示録にそのようなところがあります。しかし、今日のこの箇所などは、未婚の人たちについて、主によって使徒とされた者としての判断を述べています。そこに聖霊の守りがあり、この判断も聖書の教えです。40 節にもこのようにあります。「しかし、そのままにしていられるなら、そのほうがもっと幸いです。これは私の意見ですが、私も神の御霊をいただいていると思います。」

26 節「差し迫っている危機のゆえに、男はそのままの状態にとどまるのがよい、と私は思います。」

「差し迫っている危機」とは世の終わりのことでしょう。パウロは、世の終わりの神の裁きが差し迫っているのだから、7 節ですでに言ったように、自分のように独身のままで働きに専念した方がよいと言います。

27 節「あなたが妻と結ばれているなら、解こうとしてはいけません。妻と結ばれていないなら、妻を得ようとしてはいけません。しかし、たとえあなたが

結婚しても、罪を犯すわけではありません。たとえ未婚の女が結婚しても、罪を犯すわけではありません。ただ、結婚する人たちは、身に苦難を招くでしょう。私はあなたがたを、そのような目にあわせたくないのです。」

主イエスの世の終わりの艱難について教えがマタイ 24 章 15 節以下に記されています。そこには「それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです」とあります。パウロもそのような心配を語っているようです。

2、 時は迫っている (29～31 節)

今日の箇所はここまで、また 32 節以下にもコリントの教会の問題をふまえた具体的なことが書かれています。そして 17 節から 24 節に一般原則が語られていたように、29 節から 31 節にも具体的な判断の基準となる一般原則が記されます。

29～31 節「兄弟たち、私は次のことを言いたいのです。時は短くなっています。今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。」

今日はここを中心に学びたいと思います。しかし、32 節にまた具体的な対応が語られているので、先にそちらを見てから、ここに戻りたいと思います。

3、 独身の男、婚約者への配慮、再婚のこと (32～40 節)

32～34 節「あなたがたが思い煩わないように、と私は願います。独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。しかし、結婚した男は、どうすれば妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、心が分かれるのです。独身の女や未婚の女は、身も心も聖なるものになろうとして、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。」

結婚において、妻を喜ばせるとか夫を喜ばせるということはよいことです。しかし、独身で主に仕えようと志すなら、それはすばらしいことだと言うのです。プロテスタント教会はそのようには考えませんが、カトリック教会は聖職者が独身であることを大切にします。古代の教会では教会の教職には常に殉教の可能性がありましたから、そのためにも大切な覚悟でした。

35 節「私がこう言うのは、あなたがた自身の益のためです。あなたがたを束

縛しようとしているわけではありません。むしろ、あなたがたが品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるようになるためです。」

実のところ、私たちには 2000 年前のコリントの教会のことを正確に知ることとは出来ません。パウロが何を言おうとしているのかについて、学者たちはさまざまな議論をします。でも、私はそのようなことを細かく詮索するのではなく、なるべくパウロの大きな意図をとらえたいと思います。そういう意味で 35 節は大切なことを言っています。次は婚約者に対する配慮です。

36～38 節「ある人が、自分の婚約者に対して品位を欠いたふるまいをしていると思ったら、また、その婚約者が婚期を過ぎようとしていて、結婚すべきだと思うなら、望んでいるとおりにしなさい。罪を犯すわけではありません。二人は結婚しなさい。しかし、心のうちに固く決意し、強いられてではなく、自分の思いを制して、婚約者をそのままにしておこうと自分の心で決意するなら、それは立派なふるまいです。ですから、婚約者と結婚する人は良いことをしており、結婚しない人はもっと良いことをしているのです。」

そして最後に再婚のことが語られます。

39～40 節「妻は、夫が生きている間は夫に縛られています。しかし、夫が死んだら、自分が願う人と結婚する自由があります。ただし、主にある結婚に限ります。しかし、そのままにしていられるなら、そのほうがもっと幸いです。これは私の意見ですが、私も神の御霊をいただいていると思います。」

4、 時は迫っている

29 節に戻りましょう。今日の説教題は「時は迫っている」としました。29 節に「時は短くなっています」とあることばは、新改訳第 3 版では「時は縮まっています」でした。共同訳は「時は迫っている」です。

「時」はカイロスという言葉が使われています。ギリシア語には時を表すことばとしてクロノスとカイロスがあります。クロノスは一定に流れる時間のことで 1 日は 24 時間、1 時間は 60 分というように、一定の測ることのできる気客観的な時間です。これに対してカイロスは、タイミングを表すことばで、今が絶好の時ですというような意味で用います。クロノスは人に与えられている時であり、カイロスは人に訪れる時であるなどと言ったりします。

29 節では、このカイロスということばで、「時は縮まっている」とか「時は短くなっています」と書かれているのですが、日本語としては「時は迫っている」がよいのではないかと思います。

時についての考え方を歴史観と言いますが、古代には夜明けと日没、季節を

繰り返す時は、繰り返すと考えられていました。これを円環史観と言います。

ルネサンス期の歴史観は退歩史観です。ジョルジョ・ヴァザーリ（1511～1574年）は古代を最上視する歴史観を提唱し、古典への復帰を促しました。これはルネサンスの精神となります。

19世紀にはマルクスの唯物論的歴史観が登場します。古代の共産制から封建制へ、それが資本主義を経て共産主義に至るという典型的な進歩史観です。

しかし、共産主義は専制になるということがわかり、資本主義も行き詰まり、地球環境の破壊により楽観的な進歩史観は成り立たなくなっています。

これに対して聖書の歴史観はどうでしょうか。聖書の歴史観は円環、進歩、退歩ではなく、始まりと終わりがある歴史です。現代はビッグバンに始まり太陽にも地球にも終わりの時があることが認識されていますから、ある意味で聖書の歴史観に近づいていると思います。

この始まりと終わりがある歴史において、パウロが特に強調するのは迫っている終わりの時です。時は縮まり、短くなり、終わりの時は迫っている、そのような意識を持って生きることをパウロは勧めるのです。

この教えがローマ人への手紙 13 章 11 節以下（p319）で語られます。

「さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いがもっと私たちに近づいているのですから。夜は深まり、昼は近づいて来ました。ですから私たちは、闇のわざを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか。」

I コリント 7 章に戻りましょう。29 節の後半です。「今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。」これがコリントの教会の具体的な課題です。しかし、続く言葉は一般的な原則です。30、31 節「泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。」

「この世に関わるな」ではありません。しかし、コリントの人々は「この世に関わり過ぎている」と言うのです。

おわりに

私たちはどうでしょうか。永遠を見据えながら今を生きる、日常のことを丁寧に行いながらそれだけに終わらない、そのような生き方をして参りたいと思います。そのような願いをもって聖餐の恵みに与りましょう。